

平成29年度 学校・家庭・地域連携サポート事業

県北地区学校支援実践研修会

in 福島市松川学習センター

目 的：学校関係者、PTA、社会教育行政関係者、コーディネーター、ボランティア等、様々な立場から学校支援活動に対する生の声を交換し合い、持続可能な学校支援活動の方向性を考える。

日 時：平成29年11月27日（月）13：45～16：30

場 所：福島市松川学習センター

講 話 「学校支援活動がなぜ必要か」

福島県教育庁社会教育課 社会教育主事 仁科 英俊

ア 学校支援地域本部（学校支援活動）事業とは

- ① 様々な体験・交流・学習活動等を通して、子どもたちの社会性・創造性等の豊かな人間性を育むとともに、地域の子どもたちと大人との交流による地域コミュニティの活性化と地域社会全体の教育力の向上を図ることを目的としている。
- ② 主に次の3つのタイプに分類される。
 - A「環境整備・地域交流支援」⇒図書整理、朝のパトロール、あいさつ運動等
 - B「授業以外の学習活動支援」⇒朝の読み聞かせ、放課後の学習会、部活動等
 - C「授業に関わる学習活動支援」⇒クラブ活動、家庭科、社会科、総合的な学習の時間等

イ 学校支援活動から地域学校協働活動へ

- ① 従来の学校支援の取組との違いは、地域による学校の「支援」から、地域と学校のパートナーシップに基づく双方向の「連携・協働」へと発展させていくことを目指している点である。
- ② 地域における教育力の低下や学校を取り巻く問題の複雑化や困難化などの背景から、地域と学校が協働・連携する必要性が求められている。
- ③ 次期学習指導要領の理念を見据えて、地域の人的・物的資源を活用したり、社会教育との連携を図ったりする「地域の開かれた教育課程」や教育内容と、地域の人的・物的資源等とを効果的に組み合わせる「カリキュラムマネジメント」の実現が望まれる。
- ④ 地域学校協働活動の推進のための社会教育法の改正（H29.4.1 施行）がなされている。
- ⑤ 福島県教育委員会では、「頑張る学校応援プラン」を策定した。主要施策3に「地域と共にある学校」を掲げ、保護者や地域が学校と一体となって子どもを育てていけるように、また、学校も地域に貢献していけるように取り組んでいる。県内に8つのモデル地区があり、県北域内では、国見町と大玉村で実践を行っている。



福島県教育庁社会教育課社会教育主事 仁科英俊

ウ 学校運営協議会との連携

- ① 地域全体で、子どもの学びや成長を支えていくために、学校運営協議会と地域学校協働本部の両輪で情報共有、連携強化を進めていくことが大切になる。コミュニティースクールを見据えた基盤をしっかりと整えていくためにも、学校支援活動の活性化が求められる。

事例発表① 福島市信夫学習センター 生涯学習指導員 菅野 敏彦 氏

ア はじめに

学校・地域教育力活性化のためには、A「学校の願い」、B「地域の願いと人材」、C「学習センター（コーディネーター）の願い」の3つが相互に関わり合うことが大切である。そのために、どうすれば無理なく学校支援を実践していけるのかを考えるために信夫地区での事例を紹介したい。

イ 実践事例（平石小学校）

①学校の願い（要望の確認）のために

- ・ 地区校長会の際に学校支援活動の趣旨説明を行い、昨年度の実践を紹介した。また、各校の課題や願いの構想を考えた。その結果、郷土の歴史を学びたいという要望が挙がり、学習センターにコーディネート依頼が届いた。

②学習センターでの人材収集

- ・ 学習センター登録団体、地区区長会、老人クラブへ学校からの要望を叶えられる人材収集を依頼した。その後、関わってくださる登録団体を決定し、ボランティア登録申請を行っていただいた。

③学校と学習センター及び担当講師との日程調整

- ・ 実施日までの講師と連絡調整、子どもたちへの事前指導、報道機関への取材依頼を行った。

④学校支援授業の実際

- ・ 教室内でオリエンテーションを行い、平石地区の概要、地名の由来と歴史、道標の役割等を説明した。その後、フィールドワークに出て、説明した内容の現場や実物を自分たちの目で確認した。教室に戻った後は、学習のまとめを行った。

⑤まとめに

- ・ 学校支援授業の成果と課題を確認し、子どもたちの感想や願いを収集した。

ウ その他の実践

- ・ 茶道体験教室、昔遊び体験教室、その他として交通安全指導やマラソン大会へのボランティア等の申請があった。

エ 成果と課題として

①成果

- ・ 学校と地域と学習センターの3者連携が深まってきている。また、学習センターが学校からの要望に応えるためのコーディネーターとしてのシステムが確立してきている。学校の依頼を受け、登録ボランティア等にも速やかに講師依頼することができている。

②課題

- ・ コーディネーター担当職員の勤務日数が短く、十分な対応ができないときがある。また学校側は、教育課程の過密化により、なかなか依頼しにくい場合もある。
- ・ ボランティア等には予算措置がないので、特別非常勤講師との格差がある。
- ・ 大規模校や中学校での対応が難しい。



事例発表①／菅野 敏彦 氏

事例発表② 福島市学習支援ボランティア代表 藤東 ヨシ 氏

「昔話でボランティア」～幼児から高齢者まで～

ア はじめに

①昔話の実演

- ・ エプロンシアターでの昔話「おむすびころりん」

②昔話と心の成長

- ・ 子どもたちにとって、昔話に登場する主人公と自分を重ね合わせることで生き方を考えるきっかけ作りになる。
- ・ 昔話にある「勧善懲悪」の教訓から道徳的素地が培われる。

イ 実践事例の紹介

①幼稚園での口演

- ・ 昔話の素語り、ペープサート、手遊び、エプロンシアター、絵本の読み聞かせ、紙芝居、二人芝居

②小学校での口演

- ・ 民話語り（昔話、地元の伝説）、紙芝居、ペープサート
- ・ 昔話のクイズ

③昔話クイズの実演

- ・ 昔話のタイトルを当て字で答えさせるクイズの実演を行った。

ウ 昔話と高齢者

- ① ボランティアとして、子どもたちに昔話を語ることは生活の変化をもたらす。また、高齢者が語ることで、先人の今に生きる知恵や人間らしい生き方を伝えることにつながる。

エ 高齢者と子育て支援

①高齢者への効果

- ・ 地域社会とのかかわりの中で、生きがいや自己有用感を感じることができる。

②子育て支援

- ・ 学校支援（昔の伝承遊び、季節の行事と伝承）
- ・ 見守り隊運動（交通事故、奪取誘拐）

オ 成果と課題

①成果

- ・ 子どもは、昔話への関心が大きくなり、家族との対話のきっかけにもなっている。また、話を聞く態度を培う機会にもなる。
- ・ 高齢者にとっては、孤立を防ぎ、高齢者が集う場の提供になる。また、ストレスの解消にもつながる。

②課題

- ・ 学校支援ボランティアの周知が不十分である。
- ・ 学校側にゆとりがない。
- ・ 学習センターの役割を明確にしたい。



事例発表②／藤東 ヨシ 氏

パネルディスカッション 「持続可能な学校支援活動のために」

- コーディネーター 佐久間敏彦氏（福島市教育委員会生涯学習指導員）
- パネラー 佐藤 哲 氏（福島地区小学校長会長／福島市立三河台小学校長）
菅野 敏彦氏（福島市信夫学習センター生涯学習指導員）
藤東 ヨシ氏（福島市学校支援ボランティア代表）
荒 哲也氏（桑折町体験活動・ボランティア活動支援センターコーディネーター）

【パネルディスカッションの実際】

- （佐久間） 今回のパネルディスカッションでは、「持続可能」という言葉がキーワードになります。それぞれの市町村では、様々な形での学校支援が行われていると思いますが、今回は学校支援活動事業に焦点を絞り、参加者個々の立場からこの事業を多面的に検証していきたいと思います。それでは、それぞれの役割、立場から学校支援の良さと難しさを発表していただきます。
- （佐 藤） 学校現場としては、学習センターと連携しながら進めています。まず、学習センターに学校から要望や願いを伝え、それに適した人材をコーディネートしていただいています。今年度、本校では、2、4学年が外国語指導、3学年が毛筆指導、4学年が囲碁指導、5学年がミシンがけ、6学年が戦争体験語りを実践することができました。学校支援活動を実践してみて良かったところは、子どもたちや先生方にとってもたくさんありますが、課題としてあげられるのは、講師としておいでになるボランティアの方が、学校の要望に添った内容を実践していただけるかが見えないときもあるということです。
- （菅 野） センター（行政）側としては、茶道体験の実践から、学校、地域、学習センターの信頼関係づくりや連携ができてきていると感じています。学校から要望が来ることによって、コーディネーターとしての役割の確立や人材活用が進んできています。また、子どもたちには郷土愛が育ってきていると感じています。
- 課題としては、コーディネーターとして時間が足りません。週に3日の勤務体制なので、学習センター内での仕事と学校支援コーディネートの仕事が重なったときに十分な対応ができないときがあります。また、学校も多忙であるために連絡調整が難しいときもあります。特に大規模校や中学校での対応が難しいと感じます。それに加え、予算措置も課題だと思っています。
- （藤 東） 継続的に学校支援に関わることで、子どもたちが意欲的に聞いてくれるようになっていくことです。話の聞き方も上手になります。また、親子の対話へのきっかけ作りや、優しさを育てる手立てになっているのではないかと感じています。高齢者にとっても生きがいになっているのではないのでしょうか。
- 学校支援としてのボランティアというシステムが分からなかったので説明していただきたいと思います。また、学校に関わりたいと思っても、学校側の余裕がないので関われないこともあります。
- （佐久間） 地域の人にとって、「学校の敷居は高い」と言われることがあります。いかがですか。
- （藤 東） ボランティアとして学校支援に関わった団体は、「子どもたちとふれあうことができ楽しかった」と言っていました。
- 「学校の敷居は高い」と言われたことはありません。



コーディネーター／佐久間 敏彦 氏

(佐久間) 桑折町で、この事業に長年関わってきたの良さや難しさをお話してください。

(荒) 桑折町は、10年前からボランティア支援センターで学校支援をコーディネートしています。支援する分野を10項目に分類し、現在104名の方々にボランティア登録をしてもらっています。年度末に学校から次年度の学校支援ボランティア要請計画を出してもらっています。その計画は、各学校が参考にできるように町内の全ての学校や幼稚園に配布しています。

良い点は、ボランティアにもメリットが多いことです。やりがいを感じ、若返るように感じる高齢者も多いと感じます。子どもたちとふれ合うことによって、エネルギーをもらえると話していました。また、スキルアップを目指して、研修する意欲にもつながっています。

課題は、長年続けるにつれて、活動がマンネリ化してしまうことです。ボランティアをする側も高齢化しており、学校のニーズに応えるための新しい人材確保が進まない場合もあります。ある程度、知識や見識が高い人材の確保が必要であると感じています。

(佐久間) 新しい学習指導要領に「社会に開かれた教育課程の実現」という文言が明記されましたが、学校としてはどのように取り組んでいくべきだと考えていますか。

(佐 藤) 学校が目指す教育内容を地域社会に発信していくとともに、一緒に協力して子どもたちを育てていこうというスタンスで実践していきたいと考えています。地域社会からも意見をいただき、学校と地域が連携しながら教育課程を進めていくことが重要だと思います。

(佐久間) 具体的なプランは、これから考えていくのですか。

(佐 藤) これまで通りではなく、プラスアルファを考えていきたいです。校長会としても取組を考えていきたいと思っています。

(佐久間) それでは、パネラーだけでなく、参加者からも学校支援活動をどのように考えているかお聞かせください。

(福島市立野田中学校長／島貫氏) 今年度は、特設駅伝部の支援をお願いしました。駅伝という種目の特性を踏まえ、専門的な指導が可能になるようにボランティアの派遣をお願いしました。このように、課外活動における支援が大変助かっていますが、教科での支援については、要請は難しい部分もあります。

(佐久間) PTAの立場からはどう考えますか。

(福島市立福島第三中学校PTA会長／菅田氏) 課外活動の中での活用や高齢者とのふれ合いを通じた活動など、子どもたちが主体的に取り組めるような実践を念頭に置きながら、学校支援の計画をしてほしいと思います。

(佐久間) 先ほど藤東氏から学校支援のシステムを知らない場合もあるとのお話がありましたが、行政担当としてはどのような周知を図っていますか。

(福島市教育委員会生涯学習課／甚野氏) ホームページに各校の実践例を掲載しています。また、各小中学校長宛に本事業の主旨や内容をまとめたリーフレットを送付し、教職員にも配布をしました。今後もさらなる周知を進めていきたいです。



パネラーの方々

(佐久間) それでは後半です。この事業が「持続可能な取組」となるために、どんなことが大切になっていくか、それぞれの立場からご提言をいただきます。

(荒) 学校もボランティアもお互いに無理なく進めていくことが、学校支援を継続するポイントだと思います。そのために、支援体制を整えることやコーディネーターの研修が必要になります。また、進んで地域に出向き、いろいろな人と交流することでネットワークが生まれます。それが我々の情報収集にもつながっています。

(藤 東) 学校支援を持続可能なものにしていくためには、やはり、無理なく進めていくことだと思います。わたしは、ボランティアの方々とコンタクトをとりながら、どんな要望に応えることができるのかをまとめて一覧表にしています。地域の環境や実情などを考慮して、どんな学校支援が可能なかをよく吟味しておくことが大切だと思います。

(菅 野) 新しいボランティアに登録してもらえる人材の発掘が求められます。また、無理せずに少しずつでいいので、ボランティアを経験した人に活動の様子を周知してもらいながら、学校支援の輪を広げていければと思います。

(佐 藤) 支援していただく方には、いきなり講師としてお願いするのではなく、教育活動を手助けするサポート役として関わっていただくと、無理のない支援へとつながっていくのではないのでしょうか。また、各学校は地域の学校として、支援に関わっていただく地域の方々との関係づくりをより一層大切にしていきたいです。子どもの成長する芽は、様々な機会に育ちます。学校だけでは見つけにくい子どもたちの成長の小さな芽を見逃さないようにするためにも、より多くの地域の人に関わっていただきたいです。

(佐久間) 各パネラーの提言を伺いましたが、共通していることが少しずつ見えてきたように思います。今後、さらに学校支援を無理なく持続していくためのヒントになったのではないのでしょうか。この場では、結論は出しませんが、グループ協議で話し合いを深めてほしいと思います。ご協力ありがとうございました。

グループ協議 「学校支援の生の声」

～それぞれの現場が抱える課題を出し合い、意見を交換する～

ア 学校支援活動の課題や悩み、疑問点や要望を出し合う

- ・部活は技術指導だけでなく、メンタルな部分の指導も必要なため、ボランティアには入りにくい部分もある。
- ・教員自体に授業支援に入っていただくメリットを理解できていない者もいる。温度差があるので学校の理解も進めていきたい。
- ・教科によってねらいがあり、支援していただくには難しい分野もある。
- ・支援を効果的に行うための打ち合わせの時間を確保しにくいことが課題。
- ・保護者として、自分たちが教えることができないことを実践していただけることは心強い。
- ・他地区との交流や情報交換をしたい。
- ・開かれた教育課程の計画をするためには、人材を知ることが必要である。
- ・先生方も面倒なこともあると思う。そこを一步踏み出して学校現場で困っていることを発信してほしい。
- ・何に困っているかを学校から発信していくことが大切ではないか。
- ・地域の人材を学習センターでコーディネートしていただくのはとても助かります。
- ・ボランティア団体に、学校のねらいをしっかりと伝えることが必要である。
- ・保護者として、地域との連携の話は学校から具体的に聞いていない。
- ・無償で支援に入っているのが非常に心苦しい。
- ・支援してくださる方の責任のあり方はどうなっているのかを知りたい。



- 夜間の学習室を、夜の9時まで開設しているが、生徒指導上の問題がある。
- 学校支援でのスポーツ活動を通して、約束を守れるようになった。中学生になっても続けてほしい。
- 依頼する要望に対して、どのくらい柔軟に対応してもらえるのか不安があり、依頼する前にあきらめてしまう場合もある。
- 地域の方の人材を知る方法として、学習センターとの連携があることを初めて知った。
- 人材リストだけでは、その人の有効性を掌握しにくい部分がある。動画などを加えた、より分かりやすく記載したリストがあれば助かるのではないか。
- 学校の希望に添った講師を派遣していただいた。活動が充実した。
- 赴任したばかりで地域のことがわからないときに、学校支援としてのサポートしていただいたことは、授業に大変役立ち、ありがたかった。
- 継続性が課題となっている。次の世代につながるように、現在のPTA年代をどう巻き込んでいくかが課題である。

イ 持続可能な学校支援活動にするためにはどうすればよいかをグループでまとめる

- 今まで学校独自で作成していた人材バンクを学習センターにも紹介し、人脈を広げていく。
- 年度当初に学校支援のシステムを学校に説明する機会を作る。
- お茶代、お菓子代、花代等、予算がかかってしまう事業への対応を検討する。
- 教育課程への位置づけをしっかりと申し送りしておくこと。
- 人材の確保、スキルアップ、開拓が必要である。
- 持続可能な学校支援にするために相互交流感が生まれるようにすれば、発展していくのではないか。
- 学校の人手不足を解消するために、支援していただく方法はないか。1人休むと職員室が空になってしまう。
- 学校側の視線を外に向けて、地域と共に子どもたちの力を高めていく発想が必要である。
- 旅費程度の予算の確保が必要である。
- 顔の見える関係づくりが必要である。
- コーディネーターのスキルアップを図り、ニーズの把握、可能な範囲の周知、人材の把握を向上していく。
- 先生方が学校支援を使う気持ちになるようにしていく。多忙化や抵抗感から充実感へ変わるようにしていく。



- 地域の方と一緒に子どもたちを教育していくスタンスを広めたい。
- 事例を広報して、学校支援依頼へ一歩踏み出す勇気を持てるようにしたい。
- 学校の立場に立ったコーディネートもできるようにしていく必要がある。
- ボランティアとして子どもたちに関わる場合は、教師のサポートという立場を忘れないようにする。

研修会の感想（参加者アンケートから）

- 学校支援活動の制度があることを知らなかったので、大変勉強になりました。いろいろな立場の方の話が聞けて、とても有意義でした。機会があれば、ぜひ活用してみたいと思いました。
- 教育現場の方々のお話が聞けて、大変参考になりました。
- 部活動でのサポートをしていただいている教員もいるかと思います。ただ、長いスパンで支援していただかないと、効果が上がらない面もあるかと考えます。
- 普段お話を伺うことができない内容でしたので、とても充実した時間でした。
- 学校はだんだんと開かれたものになってきていると感じました。支援の手が学校現場にどんどん入ってくると良いと思いました。
- 学校現場では、話すことの少ない方々と意見交換ができて良かったです。開かれた教育課程づくりには、このような機会が必要です。
- 学校、ボランティア、コーディネーターなど、それぞれの思いが分かって良かったです。
- 本日はありがとうございました。全体的に充実した内容なので、時間が不足していたように思いました。特に、事例発表にもっと時間があると良いと感じました。来年も楽しみにしています。
- 大いに意識付けになりました。制度を有効に活用するよう、取り組んでいきたいと思えます。
- いろいろな立場の方の話が聞くことができ、大変参考になった。
- 教員に対するこのような研修を希望する。
- 福島市教委さんの学校支援に対する気合いのすごさが伝わってきた。先生方がこんなに参加していることが素晴らしいです。
- グループ協議は、それぞれの立場の方々の生の声を聞くことができ、よても良かった。
- グループ協議で、ボランティアの活用をうまくやっている学校の話が聞けて良かったです。まねしてみようと思いました。



成果と課題

<成果>

- 学校関係者、PTA、社会教育行政関係者、学習センター等のコーディネーター、ボランティアなど様々な立場の方が集まって、この事業を振り返り意見交換をしたことにより、これからの学校支援活動のあり方について考えを深めることができた。
- 学校支援活動のよい点はもとより、問題点や日頃の悩み等を話し合ったことで、持続可能な学校支援活動へ向けての方向性を探ることができた。
- 新学習指導要領に示される「開かれた教育課程作り」や「地域と学校が一体となった教育活動」の重要性について、学校と保護者、地域社会が認識を共有することができた。

<課題>

- 学校を核とした地域づくりをめざし、学校と地域社会の双方向でパートナーシップをとっていけるよう、さらに実践を積み重ねていくことが求められる。
- グループ協議の時間が十分に確保されなかった。より充実した話し合いになるよう、研修の時間配分や内容を検討する必要がある。